

ル・グラン・シャリオ賞

『築二十年で築くもの』

岡本なつめ

隣の家がリフォームをした。

私が生まれるずっと前からあった家で、どっしりとしたコンクリートに、左官さんが塗ったような細かい砂混じりのモルタル外壁と鮮やかなオレンジ色の煉瓦タイルが特徴的だった。当時の新築の家としては珍しいデザインだったようだ。白とオレンジ色、そしてその家のおばさんが育てている、よくわからない観葉植物の黄緑色のコントラストが、築二十数年たってもなお眩しくて、建てたばかりのころは空の青色と合わせてさぞかし目立っていたのだろうと感じられる。

この家の、特に外壁には小さい頃はよくお世話になったものだ。年の離れた兄と家の前でよくサッカーやバドミントンをしていて、ご近所中の壁やガレージにボールをぶつけ、他所様の庭にバドミンソンのシャトルを入れてしまうことなど日常茶飯事だった。それでも今まで一度も怒られたことがなかったのは、母親のご近所づきあいの賜物だと思うが、何より近所の人々同士が深い信頼関係を築いていたからなのではないかと思う。家の外で出会ったら挨拶をし、ついこの前も聞かれたのに年齢を答え、「あら、この前まで赤ちゃんだったのに！大きくなったねえ」と定例文句を言われる。毎日昼になると、筋肉むきむきの上半身をさらけ出し、タバコを庭で吸っているおしゃべりな向かい内のおじさんに捕まり、長話に付き合わされる。おばあちゃんが送ってきた野菜をご近所に配り、お返しにお菓子をいただく。もちろん笑顔を忘れずに、だ。大して生産性もないようだが、これをきちんとやるかどうかでここから先半年間、サッカーを住宅街の中で出来るかが決まるのだ。「あそこの家の子はいい子だから、多少外壁にボールがあたりはするけれど、家の物を壊したりする前にきちんと自制するだろう」という信頼が、ここで生まれる。そのために、挨拶だけはきちんとしてきたつもりだ。

このご時世、東京では引っ越してきてもご近所に挨拶はしていけない、というのが常識になりつつあると聞く。防犯上、なるべく自分の個人情報や外部に漏らさないためだ。そういえばこの間初詣に行った時も、祈願札に名前を書いていないものが多かった。これがいわゆる時代の流れらしい。私の周りの家はまだ年に一度集まってバーベキューをするくらい仲が良いが、もしかしたら大阪でもそういった、孤立連立住宅街が増えているのかもしれない。面倒なご近所づきあいを避け、なるべくトラブルを起こさないようにひっそりひ

っそりと暮らす。どんどん周りの家との交流は、安価で薄く、手入れの楽なものへと変わっていているように感じる。

かくいう私も、高校生になった今はめっきりご近所さんと話をする機会も減り、偶然目があった時に会釈をして、逃げるように家に入る程度の付き合いになっていた。大人になったらいつかは母親のようにご近所さんに笑顔で挨拶をして、実家から送られてきた野菜を配ったり、お菓子をいただいて笑顔でお礼を言ったり、そういうことが自然に出来るものだと思っていた。でも、大人へあと一歩、というところまで来た今、変わるべきなのは自分であることに気づいた。次会った時は、笑顔で目を見て挨拶できるようにしよう。最近の目標である。

リフォームをした隣の家は、あのオシャレな外壁も、タイルも全部すっかり変わり、最近の家にありがちな軽そうな、偽土壁タイルになっていた。ずっしりとしたモルタル外壁に比べて、叩くと軽そうな音がする。家の前を通るたびに、母親と「前の家の方が素敵だったのにね」なんて会話をしている。建築事情についてはよくわからないが、最近の外壁の方が生産性も良く、安価で手入れがしやすいらしい。新しく建つ家はみんなコンコンと、軽くて薄っぺらい音を鳴らす。それを聞くたびに、重そうなあの外壁と、「大きくなったねえ」と声をかけてくれたおばさん達のことを懐かしく感じてしまうのだ。

外壁だけでなく、人との繋がりさえも軽くて薄っぺらい家が増えている。